

「つたえること・つたわるもの」№207

〈いのち〉と〈からだ〉の社会学 9

「傾聴の本質」を考える 4——

「助ける」と「助けられる」の融合、「贈与と返礼」のバトンプラス、〈つながり・かかわり・めぐりあい〉。

★「社会奉仕」は、「誰のために」やるのか？

いまから68年前(1958年)、中学一年生だった私は、学校(渋谷区立本町中学校)から派遣されて、埼玉県長瀬町で開催された青少年赤十字(Junior Red Cross)の夏期研修会(合宿)に参加しました。

研修会の冒頭、講師から「皆さんは、奉仕活動(無償のボランティア)を、誰のためにするのですか？」と質問され、一人ずつ答えることになりました。

(自分のため、では傲慢で利己的に思えるし、みんなのため、ではいかにも偽善的に聞えるし……)

いろいろ悩むうちに、私の番が回ってきて、「他人に強制されたのではなく、自分の意志でやりたいと考えたので、奉仕活動は自分のためです」

と答えたものの、何か釈然としない気分でした。

それから24年後(1982年)、作家の遠藤周作さんが提唱した「心あたかな医療」キャンペーンの一つ、入院患者のベッドサイドでの「傾聴」をめざす「遠藤ボランティア・グループ」が発足し、私は遠藤さんから「顧問」を命ぜられ、そのあと同グループの「代表兼顧問」を昨年3月まで務めました。

ここでも、病院ボランティア(交通費など経費は自弁。無償ボランティア)は、「いったい誰のためにするのか」という「問い」が立てられました。

そこでいま、改めて「ボランティア」(自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為)における「傾聴の本質」をさぐってみたいと思います。

1. ボランティアは、他者・社会との〈つながり・かかわり・めぐりあい〉のキックオフ

ネットワーク論、非営利組織論が専門の慶応義塾大学教授(現在は名誉教授)・金子郁容さんの著書『ボランティア もうひとつの情報社会』(岩波新書、

1992年)は、ボランティアの本質を「自分の内側」から考えるための好著です。(※太字表記は原山)

★「助ける」と「助けられる」ことの融合。

金子さんは、同書「はじめに」で、中学一年生の私が「自分のためです」と答えたものの、何か釈然としなかった気分について、次のように解説しています。

自己犠牲こそがボランティアの本質だと聞けば、ほとんどの人はそんなことは私にはとうていできないと思うだろう。「そのように心から思える聖人のような人は滅多にいないから、ボランティアはたいていが偽善者なのではないか」と思う人がいてもおかしくない。ボランティアの対象になる側では、こんな気持ちでボランティアされるのでは気が重くてしかたがないだろう。これでは、ボランティアが、人をつなげるのではなく、人と人を切り離してしまうことになる。

ボランティアは「助ける」と「助けられる」ことが融合し、誰が与え誰が受け取っているのか区別することが重要ではないと思えるような、不思議な魅力にあふれた関係発見のプロセスであるというのに。

(『ボランティア』 6ページ)

★ 実は、力をもらったのは私の方だった

次に、金子さんが体験した「ボランティア事例」と、そこから「得られたもの」について紹介します。

——1990年11月のある日、その当時、金子さんがボランティアとして参加したNPO法人アガペハウスのオフィスで、米国ロスアンゼルス空港の案内所職員から料金受信者払いの電話で、「ここに一人、日本人らしき男性がいる、何か問題があるようだが英語ができない。話を聞いてほしい」という依頼を受けました。

その日本人は東北地方の小さな会社の漁師の人で、南米で漁をした帰りに、一泊するつもりで予約していた空港近くのホテル名を書いた紙をなくして途方に暮れていました。その人から聞き出した「うろ覚えのホ

テル名（アレーシア、アレンディア？）から、金子さんがKDD 海外番号案内で調べたホテル候補に、一つずつ順番に電話した結果、「その名前で今晚予約があるが、まだお客は到着していない。空港からは15分おきに専用のシャトルバスが出ている」という情報を、「アシエンダ」ホテルから聞き出します。

そのあとすぐ、空港の案内所に電話をし、その人にホテル名を告げ、案内所職員にシャトルバスの発着所への誘導を依頼しました。この間、30分ほど。その後、その人から電話がなかったことから、無事ホテルに着いたのだろう——と推測して、金子さんは「一件着」としました。それは、なぜかというところ……。

もしロスアンゼルス空港の案内所の人がアガペハウス（日本）に電話をしてこなかったら、その漁師の人は空港の待合室で一晩過ごすことになったかもしれない。生死にかかわることではないが、仕事を終わったところで疲れていたろうし、言葉が通じないところで心細い思いをしたであろう。

私のしたことは、それ自体たいしたことではないが、何かしらの役には立ったわけだ。普通の言い方をすれば、私が困っていたその漁師の人を助けたのだが、実は、力をもらったのは私の方だったというのが実感だった。この見知らぬ人を通して、自分がいる東京の小さなオフィスに「窓」が開かれて、「世界」につながっているような気がしたのだ。そして、この三十分の間、私は自分の中に何か力が溢れてきたような気がした。このとき、私は、自分の力というものは、それを与える人がいてはじめて存在できるのだなと思った。

『ボランティア』116～117 ページ)

★ボランティアについての「報酬」

その人から「力をもらったのは私の方だった」という金子さんにとって、それがボランティアについての「報酬」、つまり「与えられた価値あるもの」でした。

私は、ボランティアが行動するのはある種の「報

酬」を求めてであるからに違いないと考える。（中略）先ほどのロスアンゼルス漁師の例でいえば、情報サービス料金を払ってもらおうとか、あとからお礼の品を贈ってもらおうという形での「報酬」は、もちろん、期待していない。しかし、私は、確かに、「もらった」のである。自分に流れ込んでくる大きな力と言う「報酬」を。このような経験がたまにあれば、そのほかの機会にも、こんどはどんなことが起こるのかという「期待」に胸を弾ませて「ボランティアのかかわり方」ができるのである。つまり、問題は、「報酬」をどう考えるかということである。

ボランティアにとっての「報酬」とは、もちろん、経済的なものだけとは限らない。その人によっていろいろなバリエーションが可能なものである。私は、ボランティアの「報酬」とは次のようなものであると考える。その人がそれを自分にとって「価値がある」と思い、しかも、それを自分一人で得たのではなく、誰か他の人の力によって与えられたものだと感じるとき、その「与えられた価値あるもの」がボランティアの「報酬」である。

ボランティアはこの広い意味での「報酬」を期待して、つまり、その人それぞれにとって、自分が価値ありと思えるものを誰かから与えられることを期待して、行動するのである。その意味で、ボランティアは、新しい価値を発見し、それを授けてもらう人なのだ。（中略）

ボランティアの「報酬」は「見つける」ものであると同時に「与えられる」ものであるということは、新しい価値が「報酬」として成立するには、ボランティアの力と相手の力が出会わなければならない、つまり、つながりがつけられなければならないということだ。（中略）空けておいた「ふさわしい場所」に相手から力を注ぎ込んでもらい、それが自分にとって価値があると感じたときに、ボランティアは「報酬」を受け取ったのである。助けるつもりが助けられたと感じ、与えているつもりが与えられたと感じる。ボランティアの「不思議な関係」の秘密は、この「つながり」というところにあったのだ。

『ボランティア』150～153 ページ)

しかし、別の視点でとらえると、「自発性パラドックス (自発的に行動する人ほど負担が増え、損をする)」という、ボランティアの「つらさ」もあります。

仮にあなたが知り合いから、エチオピアで飢餓に苦しむ難民救済のための募金に協力してくれと頼まれたとしよう。はじめから断ってしまえば、多少のうしろめたさは残るもののそれで一応、事態は収まる。しかし、もし協力を表明したとすると、あなたは、募金箱に百円入れても、千円入れても、一万円入れても「なぜもっと出せないのか」と言われるかもしれないという「つらい」立場に立たされることになる。(中略)

ボランティアが経験するこのような「つらさ」は結局、自分で進んでとった行動の結果として自分自身が苦しい立場に立たされるという、一種のパラドックスに根ざすものである。以下ではこれを「自発性パラドックス」と呼ぶことにする。この言い方をするなら、ボランティアとは、自発性パラドックスの渦の中にあえて自らを巻き込む人のことである。(中略)

『ボランティア』103～105 ページ)

★「言い出しっぺは損をする」、「わりをくう」

金子さんは、この「自発的パラドックス」が発生するひとつのパターンを、「言い出しっぺは損をする」、あるいは「わりをくう」と表現しています。

自発性パラドックスが発生するひとつのパターンは、いわゆる「言いだしっぺは損をする」ということ、つまり、自ら進んで行動を取った人は、その後もいっそうの自発性を発揮することを期待され、しかも、傍観しているだけの人の分までの負担を負わされて「わりをくう」というものである。

ここで注意しておきたいのだが、人からいろいろ言われるということだけなら、人のことは無視する

とか、「そういうお前はどうか」と反撃することによって一応の対応はできる。ここでいっている「つらさ」の本質は、人から攻撃されるということではなく、むしろ、問題が自分に返ってきて自分自身を問うところにある。(中略)

(※たとえば、先ほどのエチオピアの難民救済) 募金という行為を通じて接することになった飢餓という問題を目の前にして、次のような二つの選択が可能だ。つまり、自分に直接関係がなく、自分の責任でもない問題は自分とは切り離して考えるのか、それとも、自分もこれまで地球資源を「好きなだけ」消費してきた先進国のひとつである日本の国民として、また、地球という共同の生活環境を共有するものとして、他国のことであるにしても飢餓の問題は自分に何らかのかかわりのあるものだ、という事態の受けとめ方をするかということである。

ボランティアとは、このうち、二つ目の選択肢のような事態へのかかわり方を選ぶ人のことである。

『ボランティア』105～107 ページ)

そして、もうひとつ、「自らをバルネラブル (傷つきやすさ) にする」「傍観者でない」という視点である「相互依存性のタペストリー」へと切り込みます。

ボランティアとは、困難な状況に立たされた人に遭遇したとき、自分とその人の問題を切り離して考えるのではなく、相互依存性のタペストリー (綴れ織) を通じて、自分自身も広い意味ではその問題の一部として存在しているのだという、相手へのかかわり方を自ら選択する人である。表現を変えるなら、相互依存のタペストリーのなかで、「他人の問題」を切り取らない、傍観者でない、ということである。

(中略)

ボランティアがかかわる問題は、たいていの場合、ごく身近な、世界の問題からすればほんの些細なものでしかないであろう。しかし、人々のあいだの相互依存性に基盤を置いて、そこから何とか活路を開こうというボランティアの問題へのかかわり方は、

問題の規模によらず、時代の先端をゆくものである。

しかし、「ボランティアとしてのかかわり方」を選択するということは、自発性パラドックスの渦中に自分自身を投げ込むこと、つまり、自分自身をひ弱い立場に立たせることを意味する。ボランティアの選択する、この「ひ弱い」、「他からの攻撃を受けやすい」ないし「傷つきやすい」状態というのをぴったりと表わす「バルネラブル (vulnerable)」という英語の単語がある。この言葉を使うなら、ボランティアは、ボランティアとして相手や事態にかかわることで自らをバルネラブルにする、ということになる。

では、ボランティアはどうして、あえて自分をバルネラブルにするのか。それは、問題を自分から切り離さないことで「窓」が開かれ、頬に風が感じられ、(中略) 意外な展開や、不思議な魅力のある関係性がプレゼントされることを、ボランティアは経験的に知っているからだ。

(『ボランティア』113～112 ページ)

★ボランティアとは、ネットワークを作る人。

金子さんと親交があり、その活動を高く評価していた松岡正剛さん(編集工学研究所所長、2022年8月没)が、書評ブログ「松岡正剛の千夜千冊」(1125夜、2006年)で、『ボランティア』をとり上げています。

松岡正剛の千夜千冊 1125夜

金子郁容 『ボランティア』 岩波新書 1992

(※松岡さんと金子さんが招かれた札幌でのシンポジウムのあと、二人で食事中に) ちょうどアメリカにいる妹さんが亡くなったばかりのことで、金子さんはこれで家族をすべて失ったとボツンと言っていた。

すぐに「一人で生きるのもいいかも」と笑っていたが、ぼくは古めかしい「連帯」という言葉をおもいついていた。そのあと、二人で情報のバルネラビリティについて話しこんだ。バルネラビリティ (vulnerability) は「傷つきやすさ」ということで、ぼくはそれを「フラジリティ (fragility : 壊れやすさ)」

ともよんでいた。情報は人々に利益ばかりもたらすものではなくて、むしろかなりきわどい「際 (※きわ: 物事の様相が転換するような重要なタイミング)」をもたらすものだという話になった。だからぼくらは情報に小さな目や翅をつけて、その翅で情報ネットワークの中を飛んで、その目でネットワークの動向を見極める必要があるねといった話をした。そんなことを交しつつ、ぼくは金子さんとはずっと仕事をしていくだろうなと確信していた。(中略)

本書には「自発性にはパラドックスがある」という説明もある。ひらたくいえばこのパラドックスは「わりをくう」というふうにあられる。せっかくボランティアをしたのにという「わり」である。しかし、この「わりをくう」という直後に、しばしば事態は劇的に変貌しうるのである。自分がうけたバルネラビリティという鍵がどこかの情報の「窓」をあけ、ネットワークに空いた「席」にやってくるものを劇的に迎えるのだ。情報を運ぶ主客が入れ替わり、ネットワーク端末がぶんぶん唸って交差点になっていくのである。

(「松岡正剛の千夜千冊」1125夜)

さらに、金子さんの「この三十分 (※ロサンゼルス空港とのやりとり) の間、私は自分の中に何か力が溢れてきたような気がした。このとき、私は、自分の力というものは、それを与える人がいてはじめて存在できるのだなと思った」実感から、「ボランティアの伝播 (ネットワーク化)」という〈つながり〉に注目しています。

著者によれば、ボランティアのかかわり方というのは、困難を抱えている人もしくは状況に対し、自分に直接的な関係がなくともそこに相互依存的なつながりを見だし、自分と結びついているというかわり方をするのである。

ボランティアとしてのかかわり方を選択することは、自らをひ弱い立場に立たせること (自らを vulnerable にすること) だと著者は言う。

そして、つながりについて。著者はボランティアのプロセスを「つながりをつけるプロセス」として捉えており、それは情報を発生させるプロセス（＝ネットワーク）と同じであるというのだ。

情報は、「与えることで、与えられる」という特性を持ち、その相互作用を経る中で意味や価値が生まれてくる。ボランティアも、相手との相互作用の中で意味や価値が生じる。つまりボランティアを行うことでそうした価値を得て、それこそがボランティアの報酬となるわけだ。

例えば、人が情報に価値を認めれば、その情報は伝播する。同じようにボランティアも伝播する。一度つながりをつけると、どんどんつながっていくというのはボランティアにおいてしばしば聞く話である。

自分の知人でKさんという人がいる。あるとき彼は仙台の街中で、落ちているごみが気になり一人で拾い始めた。せっせとごみを拾い集めているうちにだんだん周りの人が手伝い始めたそうだ。街のごみはKさんが捨てたわけではない。しかし彼は自分の問題としてそれを引き受けた。つまり、そこでごみの問題と彼がつながったわけだ。そこに価値を見つけた人がどんどんつながってきたのだろう。（中略）

金子によれば、ボランティア活動は、次の三つのステップをもつ。

<3つの行動ステップ>

ステップ1「まず、自分から動く」——勇気をもって

ステップ2「評価を相手に委ねる」——ゆったりと

ステップ3「相手が動いたら、タイミングよく対応する」——恥ずかしがらずに

実はボランティア活動を受ける相手もまたおなじように、この3ステップを踏むことになる。

自らをバルネラブルにするのは、何のルールも後ろ盾もないところで、ひとりの個人として行動するからである。そこには、自由もあるが、リスクもある。そのようなリスクを犯して、互いに出会うところに、人間としての対等の関係があり、人間として

の尊厳があり、相互承認が成立する。

なお、この3ステップの「動く」とか「反応する」ということを「情報を出す」と置き換えれば、この「つながりをつけるプロセス」とは、実は、動的情報を発生するプロセス、つまり、ネットワーク、であることがわかる。つまり、ボランティアとは、ネットワークを作る人、ネットワークナーなのである。

（「松岡正剛の千夜千冊」1125夜、2006年）

2. 私たちは自分が欲するものを他人にまず贈ることによってしか手に入れることができない。

金子さんの『ボランティア もうひとつの情報社会』から——情報は、「与えることで、与えられる」という特性を持ち、その相互作用を経る中で意味や価値が生まれてくる。ボランティアも、相手との相互作用の中で意味や価値が生じる。つまりボランティアを行うことでそうした価値を得て、それこそがボランティアの報酬となる——を読んだあと、内田樹さん（神戸女学院大学名誉教授）のブログ『内田樹の研究室』（2010年11月8日）を、改めて読み返してみました。

★「わり」をくう→「わり」を配る（パス）

すると、「私たちは自分が欲するものを他人にまず贈ることによってしか手に入れることができない。それが人間が人間的であるためのルールです」（内田樹）と、「与えることで、与えられる」（金子郁容）が、ともに同じ波長であることに気づいたのです。

内田さんは、『ひとりでは生きられないのも芸のうち』（文春文庫、2011年）「文庫版のためのあとがき」で、たとえば、ボランティアの「持ち出し＝オーバーアチーブ（少しだけ余分に仕事をする）＝贈り物・贈与」（「わり」をくう）を受けとった人が、贈り主を含むすべての人たちに、それ（オーバーアチーブ分）を「返礼」として次々にパス（「わり」を配る）していく（贈与と返礼の循環サイクル）について書いています。

他人に贈与しない人は誰からも贈与されることが

ない。その人は自分が必要とするものをすべて自分で手に入れなければならない。「それでも、いいよ。誰にも面倒なんかみてもらわなくても、オレはひとりでも、個人の努力で手に入れられるものには限りがあります。現に、僕たちが享受している「社会的共通資本」（海洋や森林のような自然資源や上下水道や通信網のような社会的インフラや司法や医療や教育のような制度資本など）は個人的決断によって改変することができません。いくらひとりで踏ん張っても、海洋の水質を保全したり、治安を維持したりすることはできない。そういう仕事はみんなで少しずつ分担するしかない。

自分に与えられた場所で（僕の場合なら教育の現場で）、自分の割り当て分よりも少しだけ大目に働く。就業規則には書かれていないけれど、誰かがそれをやっておくと、システムの瑕疵がカバーされ、「いいこと」が少しだけ積み増しされそうなことがあれば黙ってやる。そのオーバーアチーブ分は給与には反映しない。「持ち出し」です。それが仕事を通じての「贈り物」です。

すべての人がそれぞれの現場で、ちょっとずつオーバーアチーブする。それによって、社会システム全体の質が少しだけ向上して、僕たちは生活の全局面で（電車が時刻表通りに来るというようなかたちで）そのささやかな成果を享受することができる。そういう意味では、僕たちはすでに贈与と返礼のサイクルのうちに巻き込まれているのです。それが順調に機能している限り、僕たちは人間的な生活を送ることができている。

そんなのは「当たり前」のことであって、自分は誰からも贈与なんか受け取ったことはない、だから誰にも贈与しない、オーバーアチーブなんて冗談じゃない、というふうを考える人は、つまり「受け取るだけで、次にパスを出さない人」は贈与と返礼のサイクルからしだいに押し出されて、周縁の「パスの通らないエリア」に位置づけられることとなります。もちろんそこでも基本的な社会的サービスは受けられます。でも、その人宛ての、パーソナルな贈り物はもう誰からも届

かない。

（『ひとりでは生きられないのも芸のうち』283～285ページ）

★ 「連帯を通じて自立する」生き方

この本の最後に収められた「あなたなしでは生きてゆけない」という短文は「連帯を通じて自立する」ための逆説的な理路について書いています。自立は「その人なしでは生きてゆけない人」の数を増やすことによって達成される。僕はそう書きました。「その人なしでは生きてゆけない人」に対して、僕たちは必ずや「あなたにはこれからもずっとずっと健康で幸福でいてもらいたい」と祈ります。その予祝の言葉に対しては必ず同じく祝福の言葉が返される。

予祝（※前もって祝うこと。農耕儀礼のひとつ）に対しては予祝を以て応じなければならない。

「おはようございます」に対しては「おはようございます」と返礼することが義務づけられている（この義務を怠るものにはきびしい社会的制裁が待ち受けています）。

それと同じように、「あなたなしでは生きてゆくことができません。あなたの末永い健康と幸福を私は切に願います」という予祝の言葉に対しても、それと同文の言葉を返すことが人類学的には義務づけられています。もちろん、そのようなつよい予祝の言葉を贈ることのできる相手は「おはようございます」という挨拶を向けることのできる相手よりもはるかに限定されています。でも、ゲームのルールは変わりません。そのような相互的予祝のネットワークのうちに自らを位置づけること。それが僕は「自立することが困難な時代における自立」のかたち、つまりその語の本来の意味における「自立」ではないかと思うのです。

（『ひとりでは生きられないのも芸のうち』281～282ページ）

なるほど、〈この見知らぬ人を通して、自分がいる東京の小さなオフィスに「窓」が開かれて、「世界」につ

ながっているような気がした) (金子郁容) も、〈ボランティアとは、ネットワークを作る人、ネットワーカーなのである〉 (松岡正剛) も、「あなたなしでは生きてゆけない」私が「連帯を通じて自立する」 (内田樹) ということも、すべて「つながりをつけるネットワーク・プロセス」につながっているのです。